



阿波三峰

朝念暮念

中津峰山如意輪寺

徳島市多家良町中津峰
TEL088-645-0008 FAX645-0508
<http://www.rmt.ne.jp/~nyoirin>
nyoirin@nmt.ne.jp

バス便、12/19、1/1、1/18 9:30 前発

問い合わせい合わせ 徳島市バス観光課 088-652-2133

親子の鐘の中津峰

年の終わりに

毎年末には人生の終わりのことを書いています。今年もいろいろの体験をした。その一つは人生末期になった場合お寺が決まっていたくないのは大変不安なものだそうだった。伊藤さんもその一人、奥様が女房の知り合いで二月頃ご主人の容態が悪いのでお寺をとの話があった。私は「私が責任を持ちますから」ということで心配しないで看病してください」とお伝えした。

聞けばお父上は私どもの高野山大学恩師で英文学の伊藤教授であるとの由、芥川龍之介と東大同期とかで、含蓄のある英文学の講義の上に単位がもらえやすいという名物教授であった。また、ご本人は徳島大学名誉教授、国立大学で最年少で教授になられた方である。当山にもたびたび登ってこられ、何度かことばを交わしたことは後にわかった。目に見えない縁に思いをふけりながらどうぞ病気が回復しますようにと本尊様にお願ひしていた。二月三月は夜中に電話が鳴るたびドキとしていたが連絡がないのをよいことにだんだん回復していることだろうと思っていた。

七月四日私は米国から来た学生たち十九名の引率責任者として京都から広島移動中、副住から電話で訃報を知った。副住に経歴、お人柄等々取材して大教授に失礼のないよう誄詞をつくるようにお願いした。そして広島のホテルにまず第一稿のファックスが送られてきた。添削して返送、再校と繰り返し返して誄詞文ができた。次は戒名、副住職に思うまま考えさせた。後述する

戒名が送られてきた。私のイメージにもひつたりである。翌五日、松山での歓迎パーティで挨拶し、受入先に無事引き渡して深夜帰山、翌日の葬儀に備えた。

当日、早め起きて本尊様に前で引導作法の前行法をじっくりと修法し、身も心も引導作法へと高めていった。葬儀場で先生のお写真に正面した。先述のように何度かお話しした方ではないが、故人が急に近くなつた。先日、奥様から、第八高等学校の校友誌と思われる「瑞陵」のページをお送りいただいた。そこには曾根興三氏の伊藤尚夫君を悼むという追悼文があった。門外漢の私は氏を存じ上げないが、奥様によると日本を屈指の化学者の由、その文で改めて先生の偉大さ、教育に対する情熱、研究者としての業績を知った。要旨を転載すると、伊藤尚夫徳島大学名誉教授は第八高等学校に昭和二十年入学、学舎も消失した中で旧制高校に学び、大阪大学理学部を卒業。無機化学研究室でいくつもの優れて論文を発表した。徳島大学に移り、一貫した化学の研究所と教育に対する情熱の強さ激しさはほとほと感嘆し敬服した。研究面では独自のアイデアで困難な実験に果敢に挑戦し、巧妙な工夫を重ねて時には相当な成果収めながらさまざまな事情で今一歩のところまで研究をうち切らなければならぬければならぬことが何度もあった。教育面では戦後の大学生の学力低下、思想の貧困化を深く憂慮して、独自の教科書を書き、また、化学のみならずその基礎となる数学や物理学の分野にもおおよぶ大部の自作テキストを教材として

昔の八高ふうの密度の高い教育に多年専念していたことは知る人ぞ知る。かかやすものは登山、身近な草花のスケッチ、寮歌を歌うことだった。そして戒名、勸学院夏山尚堅居士の中に伊藤君のすべてが物語られている。最後に、相剋の世の値なき名利を去りて一燈に同じ思いを相抱く、愛しき強き力かな」という寮歌の一節を掲げ、伊藤先生を哀悼されている。

先述の事情を大先生にお褒め頂くと汗顔のいたりであるが、副住にとつて忘れがたい思い出となつてお経を綴りながらこのようなご縁を得たことに感激ひとしおなのである。

中門

先月号に掲載した故麻植

巖翁の家には中門がある。中門とは旧家の門を入ると母屋とのあいだにある小さい門をいう。当山の総代さんの家に三軒だけ残っている。麻植さんが中門をどのように使ったかが問題になった。私には以前、飯谷町の総代、松田さんの法事に玄関からおじやますと、今日はお先祖様の法事です。中門からお入りください、と亡くなった先代の大奥様にいわれた経験の話だ。だが、それ以外のことはつきりない。ちよつと百味供養会のお願いに八多町の総代、武内さんに行くとき、大奥様がご在宅だった。曰く、最貴客の出入りに使つたもの。御住さん、かしこまつた家の行事のとき、我が家の先代が亡くなったとき、病院から帰るときは中門から出しました。と明確なお答えいただいた。

その次の麻植家の七日にそのことをいふと、そういえば私が嫁に行くとき中門からだつたよと。

中門は小さくとも手はこんでいる。最上の材料を集め、規矩術の粋を駆使して真っ直ぐの部分ほとんどない、文化財級のものはかりである。しかし、なにも知らない今の合理的主義から解体されることも多い。武内家では数年前の新築の折、工事中大事にテントでぐるん保管理しておき同位置に修復して再建している。建造物という物は残っても使い方は一軒しか答えられない方がいない。これが文化財保護と言つより文化の保護（伝承）がむずかしいところ。今様に考えれば玄関から入らず、中門から表の間に直接入るのは不自然のように見える。だが、一般的な古い農家では中門はなくとも、農家の表の間（床の間）の対面の縁側に大きい踏み石がある。それは中門ありと感して最貴客が入る風習の名残りである。我々僧侶は表の間の縁側からこの踏み石をつかつて入る。こつちにあるお家である。こつちの伝承こそ、その家の誇りなのだ。大切にしたい。

文化財の問題も同じである。世界の仏教遺跡も僧侶がいて佛教を守っているところとそうでないところがある。それは中門と同じような問題を含んでいる。

余談だが、先述の葬儀屋の都合で風習がかわることもある。というのは、ここからいえる。中門が何かを知らない葬儀屋が勝手な方法で葬儀場を設けることをいっているのである。偉そうに生臭を枕元にまつらせたり行列の道具を省略したり、先の「土風」を無視する葬儀屋は二度と呼ぶなと言いたい。

2000年を観音さまと迎えますよう。



元旦より3日まで新春ご開帳式会
17、18、19初
1月18日大般若転読法会

Sさんへの手紙

徳島出身で東海地方に住むSさんから手紙が来た。先般、子供の友人の父上が亡くなられ葬儀に参列した。そのとき手渡されたリーフが同封されていた。それは、葬儀式について「とあり、内容は「清め塩」は必要ない。「友引」にとらわれるべきでない。それらは迷信だ。というものでない。このリーフは文責者かかれていない。

Sさんは「小さい頃、父母より「清め塩」とは霊が間違っているのではないように「友引」にお葬式しないのは、再び悲しい別離である。お葬式を出すことのないように願う」と願うとのことと記憶しています。この地では紙片に書いてあることが常識のようです。が、「住職の意見」という要旨の丁寧な手紙である。

私はすぐ以下の手紙を書いた。Sさんには失礼だが読者のみなさんも関心があり、かつ賛否両論ありそうなので本誌に掲載させて頂くことにした。

拝復、「家族一同お元氣の様子、お歎息申し上げます。さて、おたずねの件、お答えになりますかどつつか。純佛教的に考えるならこのリーフは正しいことです。しかし現代の日本人が脳死を死として受け入れがたいように理屈どおりには行かないのが人の生死に関わる問題です。友が死んでも自分は連れていかないでというのが心情的ではないでしようか。また、猿は死を認められないのか猿の子供が死んでも白骨化

してバラバラなってしまうまで抱き続けるといいます。同じ佛教圏でもチベットでは最後の布施として自分の身を切り刻んで禿鷹に喰わせる風葬、ヒンディー教徒は火葬の後カンスに流すのを最上とします等々奇妙な儀式とも思える風習が世界各地にはあるわけです。

この結果、徳島の火葬場などは休みです。これが香川の西讃地方に行くとき全く無視し友引に葬儀が行われていません。おわりのように葬儀とは佛教で執り行われていても、実は神道や日本の古くからの風習を伴っているのです。最近、無宗教の葬儀が時々報道されます。沢村貞子の旦那がそうでした。何かの時に彼女が書いたものには「或いは津川雅彦かも知れません」では佛教式に一周忌、三回忌とやっているようです。ここでは無宗教といえども葬送の儀式はあるということ

一冊の本 『鳥たちのいる風景』

草薙ひろし (日下守) 定価二千円

著者は佐那河内村の出身。長年城南高校で英語の教鞭をとられた。長年のおつきあいの私であるが、歌人であること、日本野鳥の会「の古い会員であることは知らなかった。先生を一口で言えば、やさしい先生である。そのやさしい人の自然、ことに野鳥たちとのふれあいが本書編纂の基本となっているように思ふ。

先生の人間性がほとばしるように野鳥と人間の関係を歌でまとめあげている。それも万葉集、古今集をはじめとして歴史をこえ、さらにご専門の英米文学の分野で空間をこえ、言語をこえ、短歌に俳句、自由詩とにひろがる。なかでも中西悟道が詳しく紹介されている。この道の人にはよく知っているかも知れないが、「日本野鳥の会」のこのこと、歌心のない私は教科書だけの記述しか知らなかった。もちろん先生の短歌もすばらしいが、著者訳の英文詩も新鮮である。このこと、いく冊もの本を自費出版されている。先生に敬意を表する。本書購入希望の方は電話0881-631-7940まで直接連絡されたい。

また、葬儀屋の都合で風習が変わることも目の当たりにしてあります。私も僧侶は別の問題ですが、一般の人が見てどの葬儀に正しいというものはありません。要は亡き人を偲ぶことが第一。それとともこの「された方々のやすらぎが得られるかどつつか」ということで昔からの風習はその意味の経験則といえましよう。

合掌。

余録

コンピュータの二千年問題は遠くの問題ではない。当山では平成五年にシステムを再構築したとき二千年問題対応という指示を出したつもりでいた。ところが今一回一番はじめのところだけが平成ではなく西暦下二桁になっていた。それに郵便番号の七桁移行でシステムを改修してもらった。余談だが、これには郵政省に損害賠償したい。こいつとき他のトラブルがつきもの。ちよつとしたことからエラーが生じる。六年前と違つところはEメールで送つてもらい、それでプログラムを改修できるらしい。私のよつなおさんにはどうして無理な世界。技師と息子とでやりとりする。そして来山願つことが半分以下ですむ。便利な時代になった

十二年秋に修復して以来五十二年ぶり当時は物不足のとき屋根の銅板が不足していた。このたひの修理でまた五十年は大丈夫だろつ。この年はいろいろあつたよつだ。先月号に昭和二十二年とあつた小松島への出張が行われたのはこの年が正しい。詳しくは昭和二十二年四月五日から十日間であつたといふ。学齢前の子供の記憶ゆえお許し願いたい。

でも、もし、なんらかの問題があるときはすぐ一報ください。どこかで一行のプログラムの違いがこんでもないことをしてくれるのがコンピュータです。私どもも二十日頃にコンピュータの日付をだまして一足先に新年を迎える。こんなところにも二千年問題がある。

ある友人のお嬢さんはロアンジェルスのある大学で勉強している。入学には英語の力をはかるトーフル六五〇点で入学した。普通むこうの短大は四五〇点、学部は五五〇点ぐらいで入学できる。この点は満点に近い成績である。徳島の高校では不可能な点である。まず、これに驚いた。それでも先方の大学では宿題が多かついていくのがたいへんだといふ。奥さんが英語に堪能なのでEメールを駆使して家族あげて支援しているといふ。第二の驚きである。こつとしてアメリカの大学に正式入学するとその日からいきなり大学英語の講義。一時間間に三時間ぐらいの予習復習が前提で宿題が課せられる。それが向こうの大学である。知り合いの学生が留学しても三ヶ月間は手紙も来ないのが普通である。

みなさんのお宅では予約型のビデオ、洗濯機、炊飯器などびよつとしたら時分がなくなつても知られない。年末セールでは電気製品を買つのはやめておいた方がよいのではないか。でも、二千年の元日を期して、ミサイルが飛んだり、停電したり、発電所が爆発したり、飛行機が墜落することはまずあるまい。当山も年末からの行事はかわらない。本堂と護摩堂の間の渡り廊下を修理した。昭和二十

先般、基礎学力で述べたりなかつたが日本の大学生とたいぶ差がある。因みに我がオオミズ大学は、厳しいアメリカの大学とのんびり型の日本の高校をつなぐトレーニング機関としてちよつと良い。とは二年在学してアリゾナ大学で宇宙工学をやるつという在学生の弁。